



fantasy★

fantasy

すぎゆくねむりのために

金属は湿っている

Meteorite

花口

Sink

散華

Ending

Slide

ウィンター・ワンダーランド

春と双子

すぎゆくねむりのために

冬の窓辺に
まいおりたひかり
スタンドグラスを
一枚一枚
はがすように
わたし、息をしている

片膝のかたむいたアリアが
氷片をたどるように
そらをめぐり
せすじを
ながれていく
まみずのつめたさに
とまどう
双翼のさかなたちに
そつと
てをのばす

まひるの月から
降りそそいだ
はねの軌跡が
泉をしらせ
わたしたちは
ほしくずを飲みくだして
よるに
駆けおりていく
かかとから
はきだされる
よわい糸が
あさとよるをつないで
てのひらのむこうに
ほら
わたしたちのせかいすが

たふたふと
たふたふと
織り上げられていく

心臓から屹立した
みずいろの地平に
きざまれた轍と
とうめいな地球儀の
ほつれを

ぬうようにして
ころげおちていく

せかい

は
こんなにも美しく
泣きたくなってしまう

淡い糸から

こぼれたひとしずくに
胸もとまでひたして

かきむしった
さくらの爪で

奏でる

いのりのうた
澄みきつた一音が
鳴り終わるごとに

糸は切れ
ほどけていく

少女の
真つ白なフレアスカート
の

ふくらみ

ただ

いまは

だれもが
そこで
ここで
あどけなくねむれ

金属は湿っている

朝日が湿原をやわらかく切り開くころ
わたしは窓をあけて
空から

剥がれ落ちた

透明な金属を

集めようと

ポウルをもって

出ていくところなのに呼び鈴がなります

スカートの裾を持ち上げて

水切りの石になったみたいに

ぽつり

ぽつり

ぐにゆりとくいこむバレエシューズ

水色の爪先は

泥におおわれたままで

湿原は朝が一番美しい

と、思う

朝日をはじいて

一番鮮やかな場所で

夜露にぬれて

透明な金属は瞬いている

草花を揺らす風が

金属を持ち上げる前に

わたしはそれを

こわごとつまんで

ポウルにいれて

ラップをする

ほら

これでもう大丈夫

帰ってきても呼び鈴がなりません
靴はきちんとそろえて

上下の鍵をしめる

それから

お風呂場でラップを

そつとはがしたら

透明な金属を

つめたい水であらう

指先が痛いほど

冷たくなっても

落としてしまわないように

丁寧に

金属が湿っている

のは

泣いているのだと思った

まひるはまぶしくて

まよなかはさびしくて

思わず転がり落ちた

きみたち

透明な金属の

かけらを

わたしは

パズルみたいに組み合わせ

小さな天球をつくる

大きな湿原の

小さな家のなかに

新しい

空がうまれる

そうだね

わたしたち

こんなふうには生まれた



Meteorite

落下していく
せなかの
窪みから
零れ落ちた
心臓のかけらが
暮れていく街並みに
溶けて

輪郭さえ
あいまいなまま
飛び込んでいく
夜の中心で
瞼の裏に
風のざわめきが
映り込む
またほしが落ちる
音を聴く
ろうそくが消える

風景が
流れていく速度で
ごらん、
閃光が落ちていく
わたしたち
紡錘状に並んで
繋がっている、
すこしずつ
かるくなる身体が
重なり合う
鼓動を
切り落としていく

瓦礫が
心臓を握りつぶして
せいけつな炎が
森を焼く
飛び立った鳥たちの
夢の残滓で
宛先はすべて消えてしまつて
大丈夫、
もうここにはだれもない、

せかいの終わりに
ふるえ続けた
夜の粒子が
火花を散らし、
ひとつずつ消えていく

落下していく、
わたしたちの鼓膜を
舐めとつた轟音に
揺れる水面
もうなにも忘れなくていい、
真みずの冷たさが
爆心で化石していく
ひかりだけ溢れ続けて、
そのとき
すべての影がわたしたちだった

式日

古ぼけた
街並みは静かで
ここでは
失われたものばかりが
とても美しい
夜のほつりを歩く
わたしは白い服を着て

広場には
踊るひとがいて
その中央には
赤々と火が燃える
わたしは
髪を切り
投げ込む
それが燃えるのを眺めている
ここには
昼がなく
炎のリズムが
いわば時間であった

広場を越え
どこまでも続く街灯が
通り過ぎるたび
消えていく
そして失われたものたちが
ふたたび失われ
それはいつまでも美しかったと
白い髪のわたしは
言うのだから



いま、分かたれはじめたせかいに
拡散していく胞子、あなたは一輪の花を抱いて
せかいじゅうのこどもたちが窓を開けるよ、
ろうそくを消したら、夜の海は
えいえんに終わらない退屈な映画みたいで

きれいな小石ひろって、海に投げたら。
忘れていくこと、たとえそれは
まどろみの手前でかぞえた星の数だった、
編みかけのセーターの目を
いくつ飛ばしたか、知らなくていい
ぴかぴかに磨き上げて、よるのそこ
はだしにとげがささらないように

いま、沈みはじめたあなたに
絡みついた糸、スカートは
ふるえだけを残して、
せかいじゅうのこどもたちが歩きだしたよ、
重力に逆らって、終わらない坂をのぼる足取りは、
約束された音階のようで

きれいな壘をひろって、つぎつぎに割ったら。
消えていくこと、たとえばそれは
はじめて雪のうえにたったときの感触、
合鍵を落としたことに気付かないまま、
珈琲豆抱えて、きみの家に急ぐ、
ひかひかに磨き上げて、よるのそこ
あなたはいつもつくしかったから、

あなただけがわたしをあざむかない、
夢のほつりを滑っていく、こどもたちに、
海水は柔らかで甘いよと、
離れていく大陸から手を振った、
あなただけがわたしをあざむかない、
くだらないポップソング口ずさんで、
流れていくなにもかもを愛している、

あなただけがわたしをあざむかない

どこまでもほどけていくうみに、あなたは一輪の花を抱いて、
海のいきものを巻き込みながら、長い髪がまじわっていく、
拡散していく胞子が、あたらしいこどもたちをつれて
あなたはいつまでもつくしく、新しい鏡を買ってあげたい
さよならの言葉だけが、いつまでも廻り続ける、
残された大陸で、糸がつむがれるのを待ちつづけた、
やさしい雨が、新しい世界を孕む。

夜を解体するあなたの腕が、こまやかに分たれて腐食していく、長い髪が放射状に散らばった水面に、月がぬらぬらと白く光っている、その胸に穴があいて、ぼこりぼこりと音がする、潮が満ち、その陰でひそやかに花がこぼれたす、ひとつふたつみつつよつつ、とお、

わたしはそこに横たわったまま
浅く目を閉じてそらを見ている

死んだ生物が群れて、あなたの下腹部を泳ぎまわり、どうしようもないのに腐臭がする、海は荒くなにかを隠すようで、泳ぐ指さきが熱をもち、震える、壊れはじめた夜の破片が、音もなく沈み、消え、そしてまた花がこぼれる、ふたつみつつよつついつつ、とお、

ほしが墜ちるその
おとをわたしほんとうは聞きたくなんてなかった

銃声のかけで不完全なひとが泣きながら笑っている
べとべとになったわたしの首をそのよごれた手で絞めて
そのまま海に沈めてください、夜は
解体されつづけている、花が咲きそしてこぼれみつつよつつ
いつつむつつ、とお、

わたしの呼吸がとまる
そのときまで眠りにつかないでいて

水面がぼこぼこ沸きあがり、弾ける泡が悲鳴のようだ、あなたの両足はしだいに感覚を失い、もう境目がわからない、その腹は大きくふくれ、空間を時間を圧迫する、欠けた夜はもう夜ではなく、そしてまた花がよつついつつむつつななつやつつ、とお、

息ぐるしさをかかえ
ながら強く祈り続けていたのは

妊娠線がはりめぐらされたからだを、解体された夜が解放する、こぼれつづける花に、ゆつくりと水面が閉じていく、その中心でわたしたちは、つぎつぎにほしを孕む、むつつななつやつつこのつ、花を手向け、とお。

Ending

紺青にけふる空を薙ぐようによぎる、小型の戦闘機は燈色に燃える閃光をつれて。ゆっくりと浮き上がりはじめた海面に、硝煙にむせた妊婦たちが次々に溺れていく。あなたはやわらかな耳朶をふるわせて魚道を探す。冷たい海のそこを、天色の目をしたこともたちがパレードのようにつらなつて、透明なからだに透ける無数の静脈がふつふつと、沸騰しているよ。きみたちの削ぎ切れた甘皮がビルとビルのすきまをやさしく埋めていく。

*

白い鳥たちが残した羽を、ひとつひとつ空に、縫い付けていく配達夫たちの横を、僕はパラボラアンテナを背負って、そのうだね、今世界は一番綺麗だと、つぶやきながら階段を昇っていく。平らかな海にぶつかって、つぶれる骨の音は新しい光のために。ねえ、そこでここで、高い建物から順に、倒壊していくのが見えるよ。海面は上昇をつづけ、境界がほろほろと崩れていくせかいで、ほとくの輪郭もまた螺旋状に崩れていき、行き場のない悲鳴がそこに反響している。

*

弱いピストルが銃声を鳴らして。無数のあなたが空へ、飛び立っていく。乱立するビル群がうす青く発光するので、たまらなく飛び降りていく生き物たちの、鼓動が僕を抱いて、もつれた足を甘く噛む。耳の奥底を水が流れる音が聞こえるかい。海面の暗さがあなたの瞳に似て、反射する赤い光に僕は誘い込まれてしまいそう。足をはやめて僕は、海の深度をはかる正確な計器になる。

*

空を切り裂いていく、あなたがよく左耳につけていたピアスのような形の舟までもが飲み込まれていく海に朝に夜に。こどもたちの隊列はよりいっそう長くうねり、その熱が海をぼこぼこと唸らせる。浮かんだ妊婦たちの放射状にのびた髪は色がぬけてまるで花のようで、僕の背中のアンテナは狂った電波ばかり受信してもう使い物になるのかもわからない。瓦解するせかいの音がこだまする、僕たちの終焉を抱いて。

*

あなたを越えて僕はここでさいごの生き物でありたかった。戦いを終えて着床したばかりの精子たちまでもがみな死んで、あらゆるが破水して羊水がせかいを埋めていく。そうだ、僕たちははじめからだれもゆるされてなどいない。そんなことははじめからわかっていたんだよ。目の端を彗星がよぎる。すべてが壊れて今、あなたの鼓動だけが耳に遠い。

水色の街に宝石が降って
海の匂いをした女の子が滑っていく
青い背骨を滑走路にして
ここではすべての飛行機が落ちた

かかとのない白い足を
出窓からぶら下げた午後
市場から果物が流れ出して
きつとだれも幸福を祈らなかつた

海底で発光する指先に
甘やかな死体が群がって
シンメトリーに散らばっていく爆弾を
解体する骨を打ち合わせる

剥製の動物が動き出して
橋と休符は書きこまれない
水色の口許をぬぐっていく楽団は
うるこの模様を真似て眠る

ウィンター・ワンダーランド

子どもたちは
隊列を組み
進軍する冬のさなかに
かさついた手のひら

眠りの中を眠るひと
ピアノの上のぬいぐるみたちと
屋根裏のゴーストが
ささやく部屋が、
軋んだ音をたてる

さようなら僕たちの
たいせつな場所
夜のそこで手をとった
美しい子どもたち
ざくざくと
足音が続いていく
ママの焼いた
ホワイト・ケーキ
紅茶に
ブランデーを垂らした
みんなきみが好きだった

眠らない
隊列は進軍する
冬が終わるまで
ピアノの蓋を閉めて
女の子は
唇をふるわせる

ピストルが
指先にはりついて
血が流れないのは
すべて冷たすぎたから

日曜の午後

讚美歌と青い空

きみはまどろんでいて

それを誰も

邪魔してはならない

どこまでもいくよ

すべての葉が落ちて

かかとに羽が生えるまで

きつと女の子はオーブンの前

読みかけの詩集を開いて

微笑んだまどろみの

数をかぞえて泣いてる



春と双子

雪解け
の真みずを飲みほす母は
耳もとに咲いた
花をついばむ嘴で
ちいさな足に
生年月日を刻印する

とんとんと、
角灯を倒していく
降り立った
ペランダで冷たくなった
少女たち
網膜の欠損した
わたしたちの眸

閉ざされた境界に
集約された嘔吐の
王国

ごくごくとのどを鳴らして
雪がれていく
残照
わたしたちは、
花の名前を知らないまま
春が来ます
しあわせの羽を落として

fantasy

<http://p.booklog.jp/book/26576>

著者 : yuko

著者ブログ : <http://chopin0304.blog98.fc2.com/>

イラスト:冬瀬むく (http://mixi.jp/view_album.pl?id=1904047)

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26576>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26576>